岩波文庫の『史的に見たる科学的宇宙観の変遷』出版についての雑感

千葉　明

「槲」79 号の大森一彦氏の「寺田寅彦の飜訳書アーレニウス原著『史的に見たる科学的宇宙観の変遷』」を読んで、その緻密な論考に敬服させられた。

氏の文に刺戟されて私の手元にある同書を見ながら、私はうって変って世間話のような事を書かせて頂く。

私がこの岩波文庫を初めて手にしたのは、大学を卒業の年に同期の友人から送別記念だとこれを贈られた時で、思えば 70 年も前の事になる。

ところでこの文庫は昭和 26 年の刊行書であったが、その後この文庫より少し縦長で紙質の良い戦前版を 2 冊購入した。いまこれ等を改めて見比べているうちに少し気になる事が出て来た。

その 1 冊は昭和 3 年 10 月 10 日発行　昭和 9 年 6 月 15 日 5 刷と奥付にある。しかしすぐその前頁に、「昭和六年八月下旬　本郷曙町に於て　寺田寅彦」という訳者附記が書かれている。もしもこの通りだとするとこの本は、寅彦の書いた附記より 3 年前にすでに発刊されていた事になる。これは明らかに初版の発行日の間違いだろうが、このミスは 5 刷だけであろうか、この前後の版はどうなっているのだろうと気になった。

もう 1 冊は昭和 16 年 7 月 1 日 13 刷で、前書と同型の戦前タイプの文庫本である。この本の奥付では初版は昭和 6 年 10 月 15 日と修正されている。ところが一見全く同じように見えるこの 13 刷と前に見た 5 刷とでは、本文の印刷頁が微妙に違っていて、本文の頁数も 278 頁から 280 頁になっている。何故このように変っているのかと改めてこの 13 刷の奥付を見ると、なる程昭和 13 年 4 月 30 日 10 刷改版発行となっている。そこで一体どこがどの様に変えられたのだろうかと調べてみた。すると、本文中の I 章と II 章にある数篇の訳詩と本文の行間が 1 行分広くされている事、一部の漢字に送り仮名が付け加えられた事（例えば或→或る、此→此の、此れ、のように）によるもので、それがつもりつもって頁の少し大きなずれになっているのであった。

この昭和 13 年 10 刷の改版は、寅彦が亡くなって既に 2 年が経っているから、これは寅彦自身は勿論見ていないし、これ等の修正はご遺族あるいは友人の小宮豊隆あたりが当ったのであろうかと勝手に想像した。

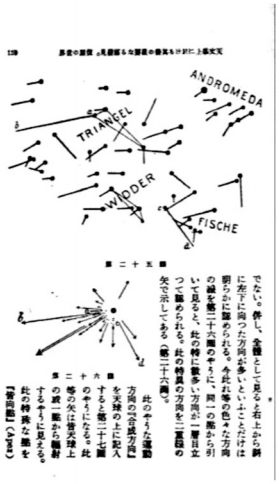
ここで話は又もとに戻るが、私が友人から贈られた文庫本は昭和 26 年 12 月 15 日 1 刷となっているが、印刷の内容は昭和 16 年 13 刷と全く同じである。何故 1 刷であろうか。

本全体の大きさは先にも述べたように縦の長さは少し小さくなっているが、本文の活字の大きさも頁数も全く同じである。強いて違いを探せば裏表紙に原著の書名が独語で、又日本での出版許可済みの事などが英語で書かれている。これだけの違いで1刷にもどるのだろうか。

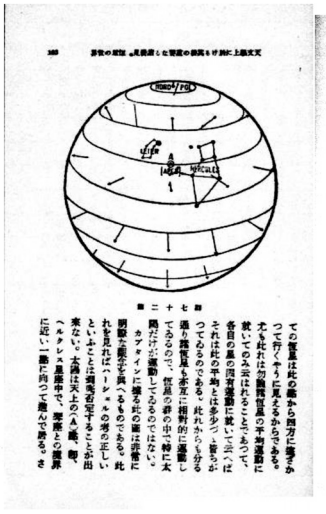
ここ迄来たので最新の文庫はどうなっているのだろうと新たに購入して調べてみた。すると最新版の奥付には1951年12月15日1刷、2017年2月21日19刷となっていた。つまり1刷は戦後の版からとり、19刷は戦前の本当の1刷からの通しNoという不思議な奥付になっていた。

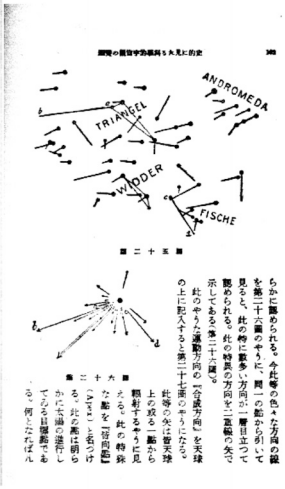
ちなみに同じ寅彦の岩波文庫「藪柑子集」では戦前の文庫から戦後のものまで通しの刷番号になっている。当然と思われる。

本の内容に関する事でなくて印刷に関する表面的な事に話は終始した。学術報告の資料の事でもないから大きな問題になることもなかろうが、岩波文庫にしては珍しい事とつい深入りをしたが、いずれお遊びに過ぎない事ではあった。　　(2017.7.25)



5刷　158-159頁





13刷　162-163頁